

京大 広報

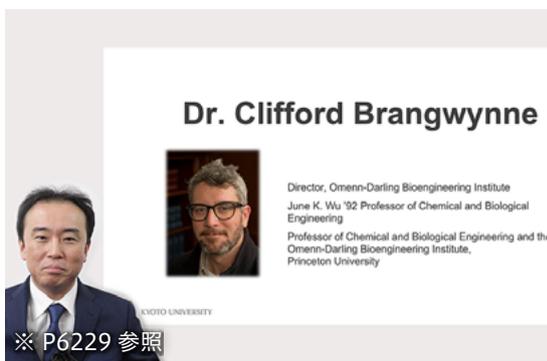
KYOTO UNIVERSITY



※ P6236 参照



※ P6224 参照



※ P6229 参照



※ P6226 参照

2025.11
No. 784

目次

[大学の動き]

- 副理事が発令される 6216
- 理事補が発令される 6216
- 部局長の交替 6216
- 名誉教授の称号を授与 6216
- 令和7年度大学院秋季学位授与式を挙行 6217
- 令和7年度大学院秋季入学式を挙行 6222
- 「京都大学オープンキャンパス 2025」を開催 6224
- 「京都大学 ELCAS2025」を開催 6225
- リガク/日本電子-iCeMS イノベーションコア (RIGAKU/JEOL-iCeMS Innovation Core) 設置 および協定締結 6226
- 「Next Frontiers in Life Science: HFSP×Nobel Prize in Kyoto」を開催 6227
- 京都大学レクチャーシップアワード2025 医学・生命科学分野の受賞者が決定 6229
- 研究評価シンポジウム「COMONとは何か-多様性と持続可能性を支える未来への挑戦-」を開催 6230
- 「アカウントビリティレポート2025」を刊行 6232

[部局の動き]

- 第18回次世代グローバルワークショップを開催 6233
- 海外の大学間学生交流協定締結校への短期派遣プログラムを実施(フロリダ大学・ベトナム国家大学ハノイ校) 6233
- 第1回多文化共修セミナー 2025 を開催 6235
- 宇治キャンパスと宇治市との連携協力懇談会、夏休み親子理科教室ほか、関連行事を開催 6236

[寸言]

- 『2つのギャップについて』 助野 健児 6239

[随想]

- 「人生百年時代」の大学 名誉教授 辻本 雅史 6240

[洛書]

- 山のすすめ 北澤 正清 6241

[訃報]

- 井上 頼輝 名誉教授 6242



京都大学

所属・職名については、行事開催時点のものです。

大学の
動き

副理事が発令される

10月1日付けで副理事が任命されました。任期は令和8年3月31日まで。



監査

塩見 淳 (新任)

[目次に戻る ↗](#)

理事補が発令される

補佐する理事	氏名	任 期	
総務担当理事、 学生担当理事	安 田 拓 人	【総務】 令和7年10月1日～令和8年6月30日 【学生】 令和7年10月1日～令和8年9月30日	(新任)

[目次に戻る ↗](#)

部局長の交替

【新任】

医学研究科長・医学部長

波多野悦朗 臨床医学系(大学院医学研究科)教授が、伊佐正 医学研究科長・医学部長の後任として選出されました。任期は令和7年10月1日から令和9年9月30日まで。



[目次に戻る ↗](#)

名誉教授の称号を授与

9月26日付けで次の1名に京都大学名誉教授の称号が授与されました。

氏 名	推 薦 部 局
田 辺 明 生	アジア・アフリカ地域研究研究科

(人事部(人事企画課))

[目次に戻る ↗](#)

令和7年度大学院秋季学位授与式を挙行

9月24日(水)、百周年時計台記念館において、湊 長博 総長、教育・学生・入試担当理事、関係部局長などの出席のもと、令和7年度大学院秋季学位授与式を挙行しました。湊総長から、代表者に対し学位記が手渡された後、総長の式辞がありました。

学位授与者数は次のとおりです。

修士

学位名	2025年9月14日付け、9月24日付け			左記のうち留学生数 [※]			累計
	男	女	計	男	女	計	
修士(文学)	0	0	0	0	0	0	5,755
修士(教育学)	0	0	0	0	0	0	1,766
修士(法学)	0	0	0	0	0	0	1,611
修士(経済学)	2	11	13	2	11	13	2,287
修士(理学)	9	2	11	8	2	10	12,946
修士(医科学)	0	0	0	0	0	0	515
修士(人間健康科学)	0	0	0	0	0	0	970
修士(薬科学)	0	1	1	0	1	1	858
修士(工学)	3	1	4	1	0	1	37,437
修士(農学)	6	8	14	5	7	12	12,511
修士(人間・環境学) ^{※1}	0	0	0	0	0	0	4,351
修士(エネルギー科学)	4	5	9	3	5	8	3,478
修士(地域研究) ^{※2}	1	5	6	0	0	0	543
修士(情報学)	13	0	13	11	0	11	4,808
修士(生命科学)	6	3	9	6	3	9	1,909
修士(総合学術) ^{※2}	1	0	1	0	0	0	86
修士(地球環境学)	3	5	8	1	4	5	880
修士(文学) ^{※3}	1	3	4	1	3	4	49
修士(グローバル経済・地域創造) ^{※3}	4	9	13	4	7	11	26
修士(社会健康医学)	-	-	-	-	-	-	66
修士(薬学)	-	-	-	-	-	-	2,299
総計	53	53	106	42	43	85	95,151

※留学生数は在留資格「留学」のみの数

※1 修士(人間・環境学)は、累計に一貫制博士課程の修士修了相当授与者9名を含む

※2 修士(地域研究)および修士(総合学術)は、一貫制博士課程の修士修了相当授与者のみ

※3 国際連携教育課程。修士(グローバル経済・地域創造)は9月14日付け修了

大学の
動き

修士（専門職）

学位名	2025年9月24日付け			左記のうち留学生数※			累計
	男	女	計	男	女	計	
社会健康医学修士（専門職）	0	2	2	0	2	2	669
公共政策修士（専門職）	2	0	2	0	0	0	724
経営学修士（専門職）	1	1	2	0	1	1	1,476
総計	3	3	6	0	3	3	2,869

※留学生数は在留資格「留学」のみの数

法務博士（専門職）

学位名	2025年9月24日付け			左記のうち留学生数※			累計
	男	女	計	男	女	計	
法務博士（専門職）	0	0	0	0	0	0	3,055
総計	0	0	0	0	0	0	3,055

※留学生数は在留資格「留学」のみの数

博士

■課程博士

学位名	学位授与者数（下段は留学生の内数※）									総計	累計
	2025年5月23日付			2025年7月23日付			2025年9月24日付				
	男	女	中計	男	女	中計	男	女	中計		
博士（文学）	2	0	2	0	2	2	0	0	0	4	1,284
	0	0	0	0	1	1	0	0	0	1	
博士（教育学）	0	0	0	1	0	1	0	0	0	1	324
	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
博士（法学）	0	0	0	0	0	0	2	1	3	3	453
	0	0	0	0	0	0	0	1	1	1	
博士（経済学）	0	0	0	0	0	0	4	1	5	5	795
	0	0	0	0	0	0	4	1	5	5	
博士（理学）	5	3	8	2	1	3	6	4	10	21	6,260
	2	2	4	1	1	2	2	3	5	11	
博士（医学）	8	3	11	6	3	9	9	2	11	31	10,964
	4	1	5	1	3	4	1	1	2	11	
博士（医科学）	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	169
	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
博士（社会健康医学）	0	1	1	0	0	0	0	1	1	2	148
	0	1	1	0	0	0	0	0	0	1	

大学の
動き

学位名	学位授与者数（下段は留学生の内数 [※] ）									総計	累計
	2025年5月23日付			2025年7月23日付			2025年9月24日付				
	男	女	中計	男	女	中計	男	女	中計		
博士（人間健康科学）	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	138
	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
博士（薬学）	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1,183
	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
博士（薬科学）	0	0	0	0	0	0	1	1	2	2	207
	0	0	0	0	0	0	0	1	1	1	
博士（工学）	7	2	9	1	1	2	22	7	29	40	6,820
	2	1	3	0	1	1	13	6	19	23	
博士（農学）	2	1	3	0	2	2	7	3	10	15	3,336
	1	1	2	0	2	2	5	2	7	11	
博士（人間・環境学）	1	0	1	2	0	2	4	3	7	10	1,191
	1	0	1	1	0	1	0	1	1	3	
博士（エネルギー科学）	0	0	0	1	0	1	4	1	5	6	509
	0	0	0	1	0	1	3	1	4	5	
博士（地域研究）	0	1	1	1	0	1	0	1	1	3	351
	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
博士（情報学）	2	0	2	1	1	2	14	2	16	20	942
	0	0	0	0	1	1	8	2	10	11	
博士（総合学術） ^{※1}	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2
	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
博士（生命科学）	1	1	2	2	0	2	0	0	0	4	550
	0	1	1	1	0	1	0	0	0	2	
博士（総合学術） ^{※2}	1	0	1	1	2	3	0	0	0	4	47
	1	0	1	0	0	0	0	0	0	1	
博士（地球環境学）	0	0	0	0	0	0	2	7	9	9	283
	0	0	0	0	0	0	1	6	7	7	
博士（経営科学）	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	38
	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
博士（ゲノム医学）国際連携	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	4
	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
総計	29	12	41	18	12	30	75	34	109	180	35,998
	11	7	18	5	9	14	37	25	62	94	

※留学生数は在留資格「留学」のみの数

旧制9,651含む

※1：情報学研究科修了 ※2：総合生存学館修了

大学の
動き

■論文博士

学位名	学位授与者数（下段は留学生の内数 [※] ）									総計	累計
	2025年5月23日付			2025年7月23日付			2025年9月24日付				
	男	女	中計	男	女	中計	男	女	中計		
博士（文学）	1	0	1	0	0	0	0	0	0	1	678
博士（教育学）	0	0	0	0	1	1	0	0	0	1	187
博士（法学）	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	205
博士（経済学）	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	409
博士（理学）	0	0	0	1	1	2	1	0	1	3	1,588
博士（医学）	2	2	4	2	1	3	4	1	5	12	2,362
博士（医科学）	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	13
博士（社会健康医学）	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	21
博士（人間健康科学）	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	15
博士（薬学）	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	774
博士（薬科学）	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	6
博士（工学）	3	0	3	1	1	2	0	0	0	5	4,222
	0	0	0	0	1	1	0	0	0	1	
博士（農学）	1	1	2	0	0	0	2	0	2	4	2,935
博士（人間・環境学）	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	57
博士（エネルギー科学）	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	64
博士（地域研究）	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	33
博士（情報学）	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	97
博士（生命科学）	0	0	0	0	1	1	1	0	1	2	34
	0	0	0	0	1	1	0	0	0	1	
博士（地球環境学）	0	0	0	0	0	0	1	0	1	1	20
	0	0	0	0	0	0	1	0	1	1	
総計	7	3	10	4	5	9	9	1	10	29	13,720
	0	0	0	0	2	2	1	0	1	3	

※留学生数は在留資格「留学」のみの数

■博士課程教育リーディングプログラム（博士課程の内数）

プログラム名	学位授与者数（下段は留学生の内数 [※] ）									総計	累計
	2025年5月23日付			2025年7月23日付			2025年9月24日付				
	男	女	中計	男	女	中計	男	女	中計		
京都大学大学院思修館	1	0	1	1	2	3	0	0	0	4	50
	1	0	1	0	0	0	0	0	0	1	

大学の
動き

プログラム名	学位授与者数（下段は留学生の内数 [*] ）									総計	累計
	2025年5月23日付			2025年7月23日付			2025年9月24日付				
	男	女	中計	男	女	中計	男	女	中計		
グローバル生存学 大学院連携プログラム	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	51
充実した健康長寿社会 を築く総合医療開発 リーダー育成プログラム	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	30
デザイン学大学院連携 プログラム	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	33
霊長類学・ワイルド ライフサイエンス・リ ーディング大学院	0	0	0	0	0	0	1	0	1	1	35
	0	0	0	0	0	0	1	0	1	1	
総 計	1	0	1	1	2	3	1	0	1	5	199
	1	0	1	0	0	0	1	0	1	2	

※留学生数は在留資格「留学」のみの数

■卓越大学院プログラム（博士課程の内数）

プログラム名	学位授与者数（下段は留学生の内数 [*] ）									総計	累計
	2025年5月23日付			2025年7月23日付			2025年9月24日付				
	男	女	中計	男	女	中計	男	女	中計		
先端光・電子デバイス 創成学	0	0	0	0	0	0	1	0	1	1	52
メディカル イノベーション	0	0	0	0	0	0	0	1	1	1	20
	0	0	0	0	0	0	0	1	1	1	
社会を駆動する プラットフォーム学	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	8
総 計	0	0	0	0	0	0	1	1	2	2	80
	0	0	0	0	0	0	0	1	1	1	

※留学生数は在留資格「留学」のみの数



湊総長による式辞



学位記授与の様子

(学務部(教務企画課))

[目次に戻る ↗](#)

大学の
動き

令和7年度大学院秋季入学式を挙

10月4日(土)百周年時計台記念館において、湊 長博 総長、教育・学生・入試担当理事、関係部局長などの出席のもと、令和7年度大学院秋季入学式を挙行しました。式典では、湊総長による式辞がありました。

入学者数は次のとおりです。

令和7年秋季 修士課程入学者数

区 分	入 学			左記のうち留学生数 [※]		
	男	女	計	男	女	計
経済学研究科	6	7	13	5	3	8
理学研究科	4	2	6	4	2	6
薬学研究科	0	1	1	0	1	1
工学研究科	0	1	1	0	1	1
農学研究科	5	11	16	5	9	14
エネルギー科学研究科	6	3	9	6	3	9
情報学研究科	19	1	20	16	1	17
生命科学研究科	8	6	14	8	6	14
地球環境学舎	4	2	6	4	2	6
総 計	52	34	86	48	28	76

※留学生数は在留資格「留学」のみの数

令和7年秋季 修士専門職課程入学者数

区 分	入 学			左記のうち留学生数 [※]		
	男	女	計	男	女	計
医学研究科	1	3	4	0	0	0
経営管理教育部	3	1	4	0	0	0
総 計	4	4	8	0	0	0

※留学生数は在留資格「留学」のみの数



会場の様子



式辞を述べる湊総長

大学の
動き

令和7年秋季 博士課程入学者数（下段は留学生数 内数[※]）

区分	入学			進学			編入学			再入学			総計			
	男	女	中計	男	女	中計	男	女	中計	男	男	中計	男	女		
後 期 課 程	経済学研究科	0	0	0	1	3	4	3	1	4	0	0	0	4	4	8
		0	0	0	1	3	4	1	0	1	0	0	0	2	3	5
	理学研究科	0	0	0	4	2	6	6	4	10	0	0	0	10	6	16
		0	0	0	4	2	6	5	3	8	0	0	0	9	5	14
	薬学研究科	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0	0	0	0	1	1
		0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	工学研究科	0	0	0	1	0	1	28	8	36	0	0	0	29	8	37
		0	0	0	1	0	1	17	6	23	0	0	0	18	6	24
	農学研究科	0	0	0	3	3	6	5	1	6	0	0	0	8	4	12
		0	0	0	2	3	5	5	1	6	0	0	0	7	4	11
	エネルギー科学 研究科	0	0	0	0	1	1	7	1	8	0	0	0	7	2	9
		0	0	0	0	1	1	4	1	5	0	0	0	4	2	6
	情報学研究科	0	0	0	3	0	3	14	5	19	0	0	0	17	5	22
		0	0	0	2	0	2	5	4	9	0	0	0	7	4	11
	生命科学研究科	0	0	0	5	2	7	2	2	4	0	0	0	7	4	11
		0	0	0	5	2	7	2	2	4	0	0	0	7	4	11
	地球環境学舎	0	0	0	0	2	2	7	6	13	0	0	0	7	8	15
		0	0	0	0	2	2	5	5	10	0	0	0	5	7	12
四年	薬学研究科	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	
一貫	アジア・アフリカ 地域研究研究科	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0	1	
総計		0	1	1	17	13	30	72	29	101	0	1	1	89	44	133
		0	0	0	15	13	28	44	22	66	0	0	0	59	35	94

※留学生数は在留資格「留学」のみの数

(学務部(教務企画課))

[目次に戻る ↗](#)

大学の
動き

「京都大学オープンキャンパス2025」を開催

吉田キャンパスを会場に、京都大学オープンキャンパスを2025年8月7日(木)、8日(金)の2日間にわたり開催しました。全面来場型による開催で、猛暑の中、大勢の高校生らが参加しました。

百周年時計台記念館百周年記念ホールで行われたオープニングセレモニーでは、湊 長博 総長による講演があり、参加者は皆、熱心に耳を傾けていました。続いて京都大学応援団により、力強い演舞演奏とエールが送られ、会場内は大いに盛り上がりました。その後、「在学生からのメッセージ」では、経済学部と農学部の在学生が、自らの受験体験や大学生活を参加者に語りかけました。

7日には総合人間学部、文学部、医学部医学科、医学部人間健康科学科、薬学部、農学部が、8日には教育学部、法学部、経済学部、理学部、工学部が、それぞれ学部説明会を行いました。学部長らによる歓迎挨拶の後、学部の紹介や模擬授業、体験学習、研究室訪問など、各学部



湊総長の講演



応援団の演舞演奏



キャンパスツアー（薬学研究科附属薬用植物園）



研究室ツアー（理学部地質学鉱物学教室）



大学院生ライブ講義



在学生交流コーナー

大学の
動き

の特徴を生かした企画を催し、参加者からは「幾つも貴重で面白い体験ができました。学部説明会が素晴らしく、自分の考え方がさらに広がりました」、「京大生の皆さんが楽しそうで家でホームページを見るだけではわからない大学のよい雰囲気を感じられたので、参加してよかったと思います」といった感想が寄せられました。

他にも、構内の各所を巡るキャンパスツアーや、学部紹介コーナー、本学学生と自由に話せる在学生交流コーナー、相談コーナー、本学の大学院生によるライブ講義、教員による講演会、サークル紹介、本学学生による公開座談会など、多様な企画を開催し、大勢の見学者でにぎわいました。

昨今、受験生の志望校選びに関し、オープンキャンパスはますます重要なものとなってきています。今回のオープンキャンパスへの参加を通して、本学の雰囲気や魅力を十分に感じていただき、入学への意欲を一層高められたことと期待しています。



学部相談コーナー



学部紹介コーナー

(学務部(入試企画課))

[目次に戻る ↗](#)

「京都大学 ELCAS2025」を開催

高校生のための体験型科学講座「ELCAS(エルキャス)」を2025年7月～8月に開催しました。本事業は、高校1年生・2年生を対象とし、主体的に学問を究めようとする高校生の育成を主な目的としています。令和7年度は「講義型」と「演習型」の2つのプログラムを企画し、全国から受講生を募集しました。

講義型プログラムは、7月31日(木)と8月1日(金)にオンラインで開催しました。研究所や教育研究施設等で先端的研究を推進する教員が講師を務め、最新の研究紹介を盛り込んだ90分間のライブ講義を実施しました。終了時には活発な質疑応答が繰り広げられ、受講した高校生からは「文理選択で迷っているときにこのプログラムに参加してみた。その中でも心理学の学問について少しでも知れてよかった」、「大学の数学など理解できない部分もあったが、それが今後の学習のモチベーションになった。質問にも丁寧に答えていただきうれしかった」、「普段触れる知識レベルよりも、より専門的で、自分の興味ともマッチしており、とても楽しかった。またこのような機会があればぜひ参加したい」などの感想が寄せられました。

演習型プログラムは、8月19日(火)から21日(木)に吉田キャンパスにて開催しました。本年度は文系・理系合わせて11テーマの講座を開講し、講座ごとに分けて実施しました。卓越した専門知識を持つ教員の指導の下、参加者は本格的な演習課題に取り組みました。受講した高校生からは「実験は細かい作業があり、汗が吹き出して止まらなかったが、やはり楽しかった」、

大学の
動き

「じっくりと時間をかけて議論を深められたことがよかった。自分だけだと気がつかないような観点・視点を参加者の皆さんと育み、よい経験になった」、「事前に自分で調べて疑問に思ったところも分かりやすく教えてもらい、勉強になった。他の参加者も同じ分野に興味がある人が多く刺激になった」などの感想が寄せられました。

本事業は引き続き、京都大学ならではの多様な学びの機会を高校生に提供していく予定です。



演習型プログラム「セルロースの科学」

(学務部(入試企画課))

[目次に戻る ↗](#)

リガク/日本電子-iCeMS イノベーションコア (RIGAKU/ JEOL-iCeMS Innovation Core) 設置および協定締結

本学は、リガク・ホールディングスのグループ会社である株式会社リガクおよび日本電子株式会社と、三者それぞれの強みを生かし、研究開発と人材育成を共同で推進するため、2025年9月4日(木)に新たなオープンイノベーションの組織を設置しました。同日、協定の締結および新組織の設置に関する記者発表を行いました。

新たに設置された「リガク/日本電子-iCeMS イノベーションコア (RIGAKU/JEOL-iCeMS Innovation Core)」は、高等研究院物質-細胞統合システム拠点 (iCeMS = アイセムス) の解析センター内に設けられた共同研究組織です。



川上 潤 株式会社リガク代表取締役社長 CEO



大井 泉 日本電子株式会社代表取締役社長 兼 CEO



湊 長博 総長



北川 進 理事・副学長 (総合研究推進本部長)



上杉志成 iCeMS 拠点長

大学の
動き

このコアは、物質科学の発展に資する研究開発拠点として、アカデミアと産業界の連携によって発見された微結晶性材料を対象に、その構造と機能の関係を解明し、新たな応用展開へ向けた基盤を築くことを目指します。さらに、極微小結晶の電子線回折を中心とした革新的な分子構造解析法を活用しつつ、新たな分析技術や研究アプローチそのものを創出することにも取り組みます。これにより、基礎研究の推進、社会への成果還元、人材育成を図り、産学連携による新たなイノベーションの創出に貢献します。



左から、古川修平 iCeMS 副拠点長、上杉拠点長、大井代表取締役社長 兼 CEO、川上代表取締役社長 CEO、湊総長、北川理事・副学長、森重文 高等研究院長

(総合研究推進本部、高等研究院)

[目次に戻る ↗](#)

「Next Frontiers in Life Science: HFSP × Nobel Prize in Kyoto」を開催

総合研究推進本部では、2025年10月4日(土)に、生命科学分野の次世代を担う若手研究者の育成と国際的な研究ネットワークの形成を目的として、がん免疫総合研究センター Bristol Myers Squibb 棟ニトリホールにて「Next Frontiers in Life Science: HFSP × Nobel Prize in Kyoto」を開催しました。本企画は、「HFSP Science Summit Japan 2025」のサテライトイベントとして、Human Frontier Science Program Organization (HFSP/O)、文部科学省、経済産業省、日本医療研究開発機構 (AMED) の共催により実施されました。



フォーラムにて若手にメッセージを送る Cech 博士、Chalfe 博士、Hanna 博士



フォーラムにて若手にメッセージを送る Hartl 博士、Hunt 博士、Quake 博士、Schekman 博士

大学の
動き

はじめに、北川 進 理事・副学長、佐藤人海 文部科学省研究振興戦略官、米田悦啓 HFSPO 理事長および Pavel Kavat HFSPO 事務局長より開会の挨拶があり、続いて HFSP 事務局から Grant・フェロースhip 制度の紹介がなされ、国際共同研究および若手支援の意義が共有されました。

午前のプログラムでは、ノーベル賞受賞者および HFSP 中曽根賞受賞者を迎えたフォーラムを開催し、「次なる生命科学のフロンティア」をテーマに議論を重ねました。登壇者には Thomas R. Cech 博士 (1989 年ノーベル化学賞)、Martin Chalfie 博士 (2008 年ノーベル化学賞)、Jacob Hanna 博士 (2025 年 HFSP 中曽根賞)、Franz-Ulrich Hartl 博士 (2022 年 HFSP 中曽根賞)、Timothy Hunt 博士 (2001 年ノーベル生理学・医学賞)、Stephen Quake 博士 (2013 年 HFSP 中曽根賞)、Randy W. Schekman 博士 (2013 年ノーベル生理学・医学賞) といった著名な研究者が一堂に会し、多様な視点からの議論が交わされました。

続いて Svante Pääbo 博士 (2022 年ノーベル生理学・医学賞、2018 年 HFSP 中曽根賞) による基調講演が行われ、進化・人類起源に関する最新知見と未来展望が提示されました。

午後からは、若手研究者を主役としたポスターセッションを実施しました。参加者はポスター前で自由に議論を交わし、招待されたノーベル賞・中曽根賞受賞者もポスターを見て回り、コメントや質疑応答に臨む場面が見られました。続いて、ベストポスター賞の表彰が行われ、鈴木飛翔さん (理学研究科修士課程 2 年生)、猪瀬春子 生命科学研究科研究員、赤木有沙 医学部附属病院特定病院助教の 3 名が選ばれました。受賞者によるフラッシュトークでは



基調講演する Pääbo 博士



ポスターセッションの様子



ノーベル賞受賞者らからコメントをもらうベストポスター賞受賞者 1



ノーベル賞受賞者らからコメントをもらうベストポスター賞受賞者 2



ノーベル賞受賞者らからコメントをもらうベストポスター賞受賞者 3

大学の
動き

斬新な研究アイデアが披露され、ノーベル賞受賞者らより応援コメントが贈られました。

終盤には京都大学レクチャーシップアワード(医学・生命科学分野)の受賞者発表が行われ、最後に、中村恒太郎 経済産業省イノベーション・環境局係長および湊 長博 総長より閉会の挨拶があり、今後への期待が語られました。

当日は学生から教員まで幅広い参加があり、会場全体に活気が満ちていました。参加者からは、「ノーベル賞研究者と直接議論できる機会」、「自分の研究を異なる視点から見直す機会になった」といった声が寄せられました。

本学では、これからも本イベントを通じて育まれた対話・交流を今後の共同研究・国際ネットワーク構築に活かすとともに、若手研究者の成長支援をより一層推進していきます。

(総合研究推進本部)

[目次に戻る ↗](#)

京都大学レクチャーシップアワード 2025 医学・生命科学分野の受賞者が決定

本学では、今年度より、「京都大学レクチャーシップアワード」を新たに創設しました。本アワードはノーベル賞受賞者を多数輩出してきた本学の伝統を背景に、将来の科学を切り開く卓越した研究者を顕彰し、国際的な研究ネットワークの形成と健全な学術の発展を推進することを目的としています。

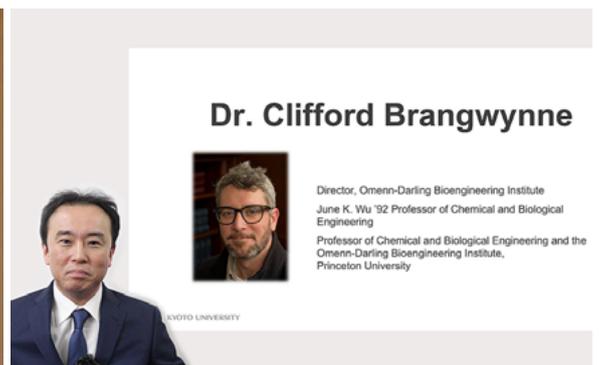
本アワードの特色は、本学の研究者が厳正に選出した優れた研究者を京都に招へいし、特別レクチャーおよび交流を通じて触発の機会を提供する点にあります。受賞者と若手研究者が出会い、学問の最前線で培われた知と視座を共有することで、新たなインスピレーションの連鎖を生み、「未来を開く研究の萌芽」を育むことを期待しています。

創設第1回となる今年度は、医学・生命科学分野における選考が行われ、プリンストン大学教授である Clifford P. Brangwynne (クリフォード・ブラングウィン) 博士(1978年生まれ、47歳)を受賞者として選出しました。

ブラングウィン博士は、物理学的概念である「液-液相分離(LLPS)」が生体内でも機能することを実証し、細胞生物学に新たな基本原理を提示した研究で、国際的に高い評価を受けています。特に、その功績は、核小体、ストレス顆粒、転写因子の集合体やシナプス後肥厚部形成機構、さらにはALSなどの神経変性疾患の理解にもつながり、細胞生物学の教科書的理解を根底から刷新する成果となりました。



レクチャーシップアワードについて紹介する
北川 進 理事・副学長



受賞者を発表する斎藤通紀 高等研究院教授(選考委員長)
(受賞者発表動画より)

大学の
動き

卓越した業績により、博士はこれまでに、ワイリー生物医学賞(2020年)、HFSP中曾根賞(2021年)、生命科学ブレイクスルー賞(2023年)、慶應医学賞(2025年)など、数多くの国際的な賞を受賞されています。

今回の選定は、ブラングウィン博士が物理学的視点を細胞生物学に取り入れ、幅広い学術領域にパラダイムシフトをもたらした実績が高く評価されたものです。博士の研究は、遺伝子発現、記憶の制御機構、神経変性疾患など、さまざまな生命現象に普遍的な説明をもたらす理論的基盤を築き、学術の発展に貢献してきました。このような根源的かつ将来性の高い発見を若年期から重ねてきた点も今回の受賞理由の一つと位置づけられます。

【関連リンク】

京都大学レクチャーシップアワード | 京都大学総合研究推進本部 (KURA)

<https://www.research.kyoto-u.ac.jp/lectureship-award/>

京都大学レクチャーシップアワード2025 [Life Science or Medicine] 受賞者発表 - YouTube

https://www.youtube.com/watch?v=IYau_QTWUNg

(総合研究推進本部)

[目次に戻る ↗](#)

研究評価シンポジウム「COMONとは何か－多様性と持続可能性を支える未来への挑戦－」を開催

総合研究推進本部では、2025年10月6日(月)に、国際科学イノベーション棟 HORIBA シンポジウムホールにて、研究評価シンポジウム「COMONとは何か－多様性と持続可能性を支える未来への挑戦－」をハイブリッド形式で開催しました。本シンポジウムは、これまで本学で重ねてきた研究評価に関する説明会などでの意見を集約し、多様な大学構成員が議論を深めることで、本学独自の評価文化を育むことを目的としました。

第1部では、開会にあたり北川 進 理事・副学長より趣旨説明があり、研究評価システム「COMON」の導入に向け、「透明性」、「公正性」、「多様性」を重視する姿勢を強調しました。

引き続き3講演が行われ、はじめに若手研究者を代表して、宇治梓紗 法学研究科准教授が、「COMON」が研究者の自律的な活動を促し、相互に影響を与え合う「大学エコシステム」の要となる可能性を示しました。続いて、国外から2名による講演があり、Leonie van Drooge オランダ保健研究開発機構 (ZonMw) 上級政策官が、同国の「戦略評価プ



北川理事・副学長

大学の
動き



宇治准教授



Drooge 上級政策官



Pedersen 教授

ロトコル (SEP)」を紹介し、多様な構成員の声を制度に反映する重要性を述べました。続いて David Budtz Pedersen オールボー大学教授が、欧州で広がる「責任ある研究評価」を紹介し、ナラティブ評価や指標の多様化が研究の質を損なわないことをエビデンスとともに示しました。

最後に、林 隆之 政策研究大学院大学教授による総括コメントがあり、日本では国立大学法人化以降、研究評価の焦点が資金提供側による業績監査に置かれ、「監査文化」が浸透する中で評価が形式化している現状を指摘しました。そのうえで、評価システムを刷新し、より質の高い挑戦的研究を支える基盤を再構築する必要性を強調し、本学の「COMON」が日本の研究評価の新たな方向を先導することへの期待を述べました。

第2部では、「COMON」運用の6原則案をもとに3卓でラウンドテーブル討論を実施しました。松浦健二 副プロボスト、木庭啓介 生態学研究センター長、田中 功 理事補がモデレーターを務め、活発な意見交換が行われました。

第3部のパネルディスカッションでは、議論内容を共有し、研究の多元性とその価値を認め合う重要性を確認し、本学から国内外へ多様な研究文化を発信すること、それにより多様な研究領域



林教授



ラウンドテーブル討論



パネルディスカッション 1



パネルディスカッション 2

と価値観のアドバンテージをより増幅できる評価システムとなることへの期待が寄せられました。

今後、本学では国内外の事例と比較研究しながら、本格稼働に向けさらに議論を進め、世界に誇る研究評価文化を共に育てていきます。

(総合研究推進本部)

[目次に戻る ↗](#)

「アカウンタビリティレポート 2025」を刊行

9月にエビデンスベースの大学運営に必要となる情報を集約した「アカウンタビリティレポート 2025」を刊行しました。本誌は「人材の育成」、「人材多様性の確保」、「研究の深化」、「社会への責任」、「財務基盤の強化」などに関するデータを経年推移で表すとともに、そのデータの解説を併せて掲載し、本学の現状をわかりやすく紹介しています。

昨年度掲載した項目に加え、オープンアクセス論文や寄付金など第4期中期目標・中期計画に関連するコンテンツを追加するなど、より充実した内容となりました。併せて、ESGや国際性に関するデータを可視化し、持続可能な社会の実現や人材育成などの面で、本学がどのように社会的責任を果たしているかを明らかにしています。

また、今年度からは掲載項目の一部を抜粋し、経年データとしてBI（ビジネス・インテリジェンス）ツールを公式ホームページに掲載しています。BIツールは、学部・研究科などの観点でデータをフィルタリングできることが特徴です。

併せて、「アカウンタビリティレポート2025」から注目度の高い情報をピックアップし、本学の「いま」を発信する関連小冊子として「TREND FOCUS」も制作しています。「TREND FOCUS」は百周年時計台記念館1階ロビー、広報センターに配架していますので、ぜひご覧ください。

【関連リンク】

<https://www.kyoto-u.ac.jp/ja/about/data>



アカウンタビリティレポート 2025 TREND FOCUS

(インスティテューショナル・リサーチ室)

[目次に戻る ↗](#)



第18回次世代グローバルワークショップを開催

学際融合教育研究推進センター京都大学アジア研究教育ユニット (KUASU) は、第18回次世代グローバルワークショップを、2025年9月26日(金)から28日(日)にかけて開催しました。今年度は「Visual Media in a Post-Growth Era」をテーマとしました。同ワークショップには世界各国から計43件の応募があり、その中からインドネシア、タイ、ドイツ、フィンランド、ハンガリー、韓国、台湾、中国、日本などの大学より20名の若手研究者が選出されました。

ワークショップは3日間にわたって実施され、メディア文化と社会変容、表象における社会意識、デジタル時代のウェルビーイングなど、多様なテーマに関する発表が行われました。初日にはShi-Che Tang 国立中興大学教授によるKeynote Speech「The Pipe of Dreams」も行われ、エネルギーと視覚文化の関わりについて論じられました。

2日目の夜には、ペヤンヌマキ監督によるドキュメンタリー映画「〇月〇日、区長になる女」の上映会が行われ、参加者とのQ&Aセッションも実施されました。

3日間のワークショップを通じて、参加者からは「研究の幅を広げる貴重な機会となった」といった感想が寄せられ、若手研究者の育成とネットワーク形成におけるワークショップの意義が改めて確認されました。

同ユニットでは、今後も次世代研究者の国際的な学術交流を促進し、彼らが世界で活躍するための基盤を提供し続けていきます。



集合写真

(学際融合教育研究センター)

[目次に戻る](#)

海外の大学間学生交流協定締結校への短期派遣プログラムを実施 (フロリダ大学・ベトナム国家大学ハノイ校)

国際高等教育院では、学際融合教育研究推進センターアジア研究教育ユニットと協力し、夏(8~9月)と春(2~3月)に東アジア、東南アジア、欧州の大学間学生交流協定締結校に本学学生を約2週間派遣する全学共通科目キャリア形成科目群「多文化教養演習:見・聞・知@~」を実施しています。このたび、フロリダ大学、ベトナム国家大学(VNU)ハノイ校にて、それぞれ本学学生がスプリングプログラムに参加しました。

同科目は、長期留学への準備や、初めて海外の大学で学ぶ機会としても活用されています。

部局の
動き

今後も、海外留学に関心のある本学学生の積極的な履修を期待しています。

【フロリダ大学】

2025年8月31日(日)から9月15日(月)にかけ、10名の学生がアメリカ合衆国のフロリダ大学にてサマープログラムに参加しました。本プログラムは、本学と学生交流を推進しているフロリダ大学工学部が中心となり、フロリダの生態系、文化交流の歴史、宇宙工学という現地特有のテーマについて学際的に学ぶ内容で実施されました。参加学生は、プレゼンテーションに特化した実践的英語の授業も履修し、最終日には自ら選んだテーマについて現地の学生と共同発表を行いました。

現地では、各分野の専門家による講義に加え、州立公園に指定されているシルバースプリングスや現役のロケット発射場でもあるケネディー宇宙センターを視察しました。休日にはフロリダ大学のアメリカンフットボールの試合を観戦するなど、本プログラムでしか体験できない貴重な経験を得ることができました。



Marta L. Wayne フロリダ大学副学長による歓迎会 シルバースプリング州立公園の視察



ケネディ宇宙センターの視察

アメリカンフットボール観戦

【ベトナム国家大学 (VNU) ハノイ校】

2025年9月7日(日)から21日(日)にかけ、7名の学生がベトナム国家大学 (VNU) ハノイ校にてサマープログラムに参加しました。

当該科目では渡航前に1週間の語学学習と共同発表に向けた準備を行い、ベトナム・ハノイでの滞在に臨みました。本学学生は、前半をVNU外国語大学、後半をVNU人文社会科学

部局の
動き

大学で過ごし、ベトナムの歴史や社会に関する講義を受講しました。また、ユネスコ世界文化遺産に登録されているチャンアンや伝統的建築が残るドゥオンラン村など、ハノイ近郊でのエクスカージョンにも参加しました。

最終日には、VNUの学生と一緒に共同発表を行いました。本学の学生は事前授業において予め調査をしたい発表テーマを定め、VNUの学生達と出発前からオンライン会議等で協議しながら現地で実地調査を行いました。テーマは日・越・中における家庭内の祭壇の比較など、現地で聞き取りした調査内容を含めながら発表しました。



授業の様子



現地でのエクスカージョン



ホーチミン廟での集合写真



VNU 人文社会科学大学キャンパスでの集合写真

(国際高等教育院)

[目次に戻る](#)

第1回多文化共修セミナー 2025 を開催

国際高等教育院では、世界の学生たちと本学学生がともに学ぶ機会の充実を図る一環で、多文化共修セミナーを開催しています。2025年度第1回は、韓国の延世大学校より学生10名が来学し、2025年9月26日(金)に開催しました。

同セミナーは、海外の学生とともに講義を受け、意見交換を行い、新しい友人を作りながら多様な視点を得る機会として本学学生向けに提供されています。

冒頭のオープニングセレモニーでは、河合淳子 国際高等教育院教授が開会の挨拶を行い、延世大学校の学生10名を歓迎するとともに、本学学生との議論と交流を積極的に行ってほしい

部局の
動き

と期待を述べました。続いて、若松文貴 国際高等教育院特定准教授が「日本の捕鯨：食と保全の文化政治学」というタイトルで、捕鯨を事例に食の多様性と禁忌に関する特別講演を行いました。

後半の学生共同セミナーでは、本学学生 20 名も参加し、生成 AI の活用方法や夫婦別姓など日本と韓国に共通する社会的課題を題材に、両大学の学生が 4 つのグループに分かれて討論を行いました。各グループとも時間がたつにつれ活発に意見が交わされ、議論が深まっていきました。

国際高等教育院では、海外から学生が来学する機会を活用し、今後も多文化共修セミナーを開催する予定です。海外学生との交流に意欲あふれる本学学生の積極的な参加を期待します。



講義の様子



ディスカッションでの共同発表



集合写真

(国際高等教育院)

[目次に戻る ↗](#)

宇治キャンパスと宇治市との連携協力懇談会、夏休み親子理科教室ほか、関連行事を開催

宇治キャンパスでは、2014年11月に宇治市と連携協力に関する協定を締結し、それ以来、教育、研究、防災・災害対応、広報等の分野において相互に協力し、交流を深めてきました。このたび、同連携協力協定に関する行事を、2025年7月23日(水)、29日(火)、8月6日(水)にそれぞれ開催しました。

7月23日には、「夏休み親子理科教室 in 京大」を宇治おうばくプラザきほだホールで開催し

部局の
動き

ました。同イベントは、親子で本学の最先端技術研究の一端に触れ、理科への興味を高め、科学技術に夢と希望を持つ人材を育成することを目指して、宇治市内在住の小学校5、6年生児童およびその保護者を対象に開催しています。今回は、海老原祐輔 生存圏研究所教授が、「オーロラから探る宇宙のふしぎ」と題して、宇宙から地球に届くエネルギーやオーロラができるしくみについて講義を行い、募集定員を超える53組106名の親子が参加しました。講義の後は気体発光の実演が行われ、参加者たちは宇宙のふしぎを体感しました。

7月29日には、連携協力懇談会（第9回）を宇治キャンパスで開催しました。宇治市からは、松村淳子 市長をはじめ関係部署の部長などが出席し、本学からは、宇治地区研究所世話部長の片平正人 エネルギー理工学研究所長、島川祐一 化学研究所長、山本 衛 生存圏研究所長、堀 智晴 防災研究所長、赤石敦一 宇治地区事務部長のほか、宇治地区各研究所事務長が出席しました。懇談会では、例年より意見交換の時間を多く設け、宇治市内在住の小学生を対象に行っている夏休み親子理科教室など教育関係事業の実施状況や国際卓越研究大学への選定を踏まえた宇治キャンパスの環境整備への協力依頼、さらに今後の連携の在り方などについて幅広く意見交換を行いました。懇談会の後は施設見学を実施し、長崎百伸 エネルギー



夏休み親子理科教室の様子（講義）



夏休み親子理科教室の様子（実演）



連携協力懇談会の様子



連携協力懇談会参加者



ヘリオトロンJの見学



実物大階段模型の体験

部局の
動き

理工学研究所教授が同研究所のヘリオトロンJについて、川池健司 防災研究所教授が同研究所宇治川オープンラボラトリーの雨水流水実験装置、実物大階段模型などをそれぞれ説明しました。

8月6日には、「中学生理科教室」を宇治地区研究所本館5階エネルギー理工学研究所で開催しました。中学生理科教室は、科学の最先端の研究に触れることにより、科学への興味を高め、科学技術に夢と希望を持つ人材育成を目指し、宇治市立中学校の理科（科学）部員を対象に開催しています。今回は、山本貴之 エネルギー理工学研究所講師と法川勇太郎 同助教により、「水素を作って電池を動かしてみよう」と題して、水素エネルギーシステムに関する講義と水の電気分解によって作った水素で燃料電池を動かす実験を行い、宇治市内の3校から15名の生徒が参加しました。直列と並列のつなぎ方について悩んだりしながらも、助け合って実験を行い、普段、学校では触れることのない実験器具などに興味を持っている様子が見受けられました。



中学生理科教室の講義の様子



中学生理科教室の実習の様子

(宇治地区事務部)

[目次に戻る ↗](#)

『2つのギャップについて』

助野 健児



私は、京都大学を卒業した1977年、富士写真フイルム株式会社(当時)に入社した。当時はカラーフイルムの国内シェアが約7割を占めるガリバー企業であったが、2000年頃からデジタルカメラやスマートフォンの急速な普及により、写真フイルムの需要が激減し、事業構造を大きく変革させなければ会社の存続すら危ぶまれるほどの瀬戸際に立たされた。写真関連事業を市場規模に合わせてスリム化させるとともに、医療画像診断機器事業、高機能材料事業を新たな成長の柱として強化し、さらに化粧品、バイオ医薬品の製造受託などの新規事業立ち上げに取り組んできた。

この過程で学んだことは、「パフォーマンス・ギャップ」と「オポチュニティ・ギャップ」という2つのギャップに陥らない、ということである。

パフォーマンス・ギャップとは、自社内では当然と考えていることと世の中の価値観との間にズレが生じているのに、そのギャップに気づかないことである。例えば、コストダウンへの取り組みは重要であるが、それを過度に重視するあまり職場環境の改善や投資が後回しになってしまうと、従業員の士気は上がらず、本来のパフォーマンスも十分に発揮できない。企業価値の源泉である人的資本を最大限活かすためにも、この視点を見失ってはならないということである。

オポチュニティ・ギャップとは、現在取り組んでいることとビジネス機会との間にあるギャップのことで、製品/サービスを提供するタイミングを見誤ってはならないということである。世の中が必要としている時に製品/サービスを提供できないのは論外であるが、世の中がその価値を十分に認識できる土壌が整っていない時に提供しても、大きなビジネスには育たないということである。市場ニーズの変化は早く、特に若い世代の価値観の移り変わりは著しい。社会が求めているものを的確にとらえ、適切なタイミングでタイムリーに提供し続けられる企業こそ、真に強い企業ではないだろうか。

近年では、グローバル化の進展に伴って経済的に豊かな国への人の移動が活発化しており、その結果として一部の国では社会構造の変化や格差に関する課題が顕在化し、保護主義的な傾向が強まる動きも見受けられる。このような国際的な潮流の変化を踏まえ、生産拠点の在り方、サプライチェーンの再構築など、時代の要請に応じたビジネス体制を常に考え、行動する必要がある。

京都大学の卒業生は、産業界、官公庁、学術分野など、さまざまな分野で活躍されており、それぞれの立場から、国際社会における我が国の考え方や役割をしっかりと伝えていくことが、ますます重要となる。そのベースとなるのが、リベラルアーツの素養であろう。より安定した国際情勢の構築に向けて、我が国の文化・歴史・伝統、そして政治・経済の歩みとその背景を深く理解し、様々な場面での情報発信と行動を心掛けていただきたい。

(すけの けんじ、富士フイルムホールディングス株式会社取締役会長、
昭和52年法学部卒業)

[目次に戻る ↗](#)

随想

「人生百年時代」の大学

名誉教授 辻本 雅史



2012年早期退職し、台湾大学で5年勤務。2017年から中部大学で勤めている。その際、副学長の立場で私立大学の今後を考えざるを得なかった。「生涯学習社会」の下での大学の役割を考えると、その時期の私の自覚した課題であった。

2025年9月現在、100歳以上の日本人はほぼ10万人。平均寿命は女87.1、男81.1歳。「人生百年時代」は今や現実である。他方、出生人口は、2024年に70万人を割り込んだ。団塊の世代である私の時の出生数の1/4弱に過ぎない。この急速な少子高齢化社会の到来は、日本が世界に先駆けて、人類史の未体験ゾーンに突入したことを意味している。その意味で日本は人類史の「実験場」である。もはや従来の発想の延長上に未来社会を描くことはできない。私の専門の教育史の観点からも直視すべき課題である。

近代国家が設計した学校教育は、近代化のためには最適の制度で、それが急速な産業化を下支えしてきた。ところが今や、脱工業化とグローバル化の進展のなか、ネットメディアが世界の現実を動かしている。歴史の歯車はすでに「近代」を通過してしまったのである。ところが、黒板を背に一人の教師が、同一年齢の30人ほどの子どもに、教科書を教える風景。それは150年前に始まった教室の風景と、構図的には何も変わっていない。子どもを取り巻く状況は全く別の歴史段階になっているというのに。要するに近代の学校はもはや時代遅れ。今の学校現場の困難ぶりは、歴史の必然にさえ見えてくる。

こうした歴史認識のもと、教育システムは再構成されなければならない。子どもの発達段階にふさわしい学校自体を否定するつもりは毛頭ない。ただ人類は、死ぬまで学び続けられる唯一の生き物。学んだ分だけ確実に自分が高まる。学びこそAI時代の知識基盤社会に欠かせない。誰もがいつでもどこでも学び続けることができる「生涯学習社会」の実現こそ、今の「学校社会」の次の段階の教育の姿であろう。

では、生涯学習社会で、大学が果たす役割は何か。大学が集積している知と文化を、すべての市民（国の内外を問わず）に開くことである。生涯学習の重要性はユネスコでも早くから提唱されてきた。ちなみに学士課程の25歳以上の学生の在籍率は、OECD諸国の平均20%に対して、日本は何と2%（2011年）。突出して低い。日本ではリカレント教育がほとんど浸透していない。リカレント教育は日本に適さないのか。否、伸び代があると私は考えている。現今の大学は、少子化＝18歳人口の急減におびえているが、人類の未体験ゾーンに入っている今、発想を変えた方がよい。18歳入学生に併せて、リカレント教育をもう一つの軸にした大学経営戦略を考えたい。そのためには、政府の政策的後押しと、企業や社会の意識の転換が求められる。

大学にはせめて生涯3回入学することを普通とする社会を目指したい。①18歳時、②仕事を通して学びたいことが見えた時、③退職以後の長い期間の生き方を見通した時。大学はそのためのカリキュラムを用意しておきたいものである。学問研究を第一義とする京大でも、私が京大生に戻りたくなくなるような京大らしい高度なリカレント教育を考えてもらいたいものである。

（つじもと まさし、平成24年退職、元教育学研究科教授、現中部大学名誉教授、専門は教育史、日本思想史）

[目次に戻る ↗](#)

洛書

山のすすめ

北澤 正清



山が好きで、二週間に一度は週末に山に走りに行きます。とはいっても本格的な登山やハイキングではなく、大阪北摂の我が家から半径10キロ圏内くらいの山道を、ちょいと走ってくる程度です。京都でいえば、吉田キャンパスを起点に、東山一帯の山々や比叡山といった範囲をイメージしてください。遠くに行くときは、自転車も併用します。

それは、トレイルランニングですかとよく聞かれますが、そんな立派なものだとは思っていません。元を辿れば、マラソン大会に向けた日々のジョギング中に、うっかり山道に迷い込んだのが始まりで、大きな声では言えませんが、装備は今も街用のシューズにペットボトル一本くらいです。交通機関や途中の食事が必要なほど遠方には行かず、標高もたいしたことないので、本格的な方が相手だと肩身が狭いです。以前、山が趣味という方と話し始めたら、海外遠征までするガチな方だったせいで当初話が噛み合わず、それ以来説明には気を付けています。

こんな中途半端な趣味ですが、いまや僕の生活に欠かせない存在です。人工物のない景色を駆け抜ける喜び、季節の移ろい、森の中を一人行く解放感などを楽しんでいます。不規則な山道で脳が行うリアルタイム画像処理と肉体制御の適度な負荷が心地よいです。山の中では極力スマホを見ないことにしており、不確かな環境に投げ出される機会でもあります。人里離れた山中でしばし覚える、命がむき出しにされるような感覚は、紛れもない山の魅力の一つです。

もっとも、この趣味が続く最大の理由は、僕が専門とする原子核理論物理学の研究活動に、山の時間が役立っているという確信だと思います。山を走ることによって体力が養われ、さまざまな感覚が研ぎ澄まされますし、パソコンの画面と紙に囲まれて過ごす研究室とは正反対の環境が、絶好の気分転換になります。30分も無心に山道を走っていると、大抵の悩みはどうでもよくなります。

思えば30代前半の頃、物理の研究以外の趣味を持とうと、Google検索に「趣味」と打ち込んだ頃から、さまざまな変遷を経て現在に至りました。物理屋なので頭を使う趣味がよかろうと、将棋の週末ネット対局を二年ほど続けた末に、将棋と理論物理は同時に考えられないという重大な欠陥に気づいて足を洗ったこともありました。研究者としての生き方に迷い、中国古典に答えを求めて四書五経を読んだり、ど素人なのにピアノを弾き始めたりしたこともありました。そんな、物理学との相性を探し求める紆余曲折を経て辿り着いたのが、僕の場合は山だったのです。

考えてみれば、日常的に山を走れるのは、そこに整備された山道があり、さらに山々まで数キロの住環境や健康な身体があるおかげです。この恵まれた環境への感謝の気持ちを噛みしめつつ、この週末もまた多分、山に向かいます。

(きたざわ まさきよ、基礎物理学研究所、専門は物理学(原子核理論、量子色力学))

[目次に戻る ↗](#)

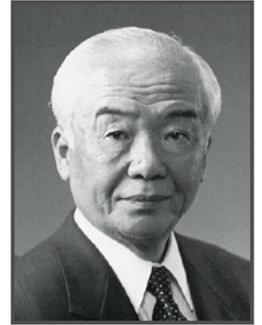
訃報

このたび、井上頼輝 名誉教授が逝去されました。ここに謹んで哀悼の意を表します。
以下に同氏の略歴、業績などを紹介します。

井上 頼輝 名誉教授

井上頼輝先生は、令和7年8月5日逝去されました。享年93。

先生は、昭和30年3月京都大学工学部を卒業し、同32年3月同大学大学院工学研究科修士課程を修了、同34年3月同大学大学院工学研究科博士課程中退、同37年1月にカリフォルニア大学大学院博士課程を修了後、同年1月から8月までカリフォルニア大学衛生工学研究所助教授(研究職)兼同大学公衆衛生学教室講師を務めた後、同37年9月に京都大学工学部助教授となり、同45年11月京都大学工学博士号を取得されました。同46年4月同大学工学部教授となり、平成8年3月に同大学を停年にて退職されるまで放射線衛生工学の教育・研究に努め、同年4月に京都大学名誉教授とされました。その後、同年4月福井工業大学教授、同9年4月から同15年3月まで同大学図書館館長、同13年4月から同15年3月まで同大学教務部長、同15年4月から同17年3月まで同大学副学長を歴任されました。先生は、老年にわたり、学生の教育と若手研究者の指導に邁進され、多くの人材を育成されました。



先生は、放射線衛生工学、水環境保全および環境リスク工学に関する研究において優れた研究業績を残され、中でも放射性核種の地中移動に関する研究において地下水そのものの動態から放射性核種の動態を予測できることを理論的に明らかにされ、“井上の方法”と呼ばれる方法の開発、水環境保全分野において“原単位法”と通称され、種々の場で活用されている環境負荷の解析手法の開発など、斯学の進歩に大きく貢献されました。これらの研究業績は172編の学術論文にまとめられ、現在も国内外で高く評価されています。

また、日本保健物理学会、日本原子力学会、日本水環境学会、土木学会衛生工学委員会、土木学会地球環境委員会などにおいて、理事、支部長、委員長等の要職を歴任されました。

国際的にも国連世界保健機関に派遣されビルマ国(現ミャンマー連邦共和国)ラングーン工科大学における衛生工学教室の創設を指導されるなど活躍されました。これら一連の教育研究活動、学界活動により、平成24年春、瑞宝中綬章を受章されました。このように井上先生は、わが国の放射線衛生工学、水質保全および環境リスク工学の専門分野において、理論的枠組みの構成とその適用実績の蓄積、および人材育成に尽くされ、その功績は誠に顕著なものがあります。

(大学院工学研究科)

[目次に戻る ↗](#)